

863  
158



国立国会図書館 タイトル『かはづの海』 請求記号 863-158

ガラス使用



特別

序

和露文庫

半時庵述

魁り名に必後々徳とたれ  
行の事申過りり時辰斗

自らの時所の業物乃余らら  
子集ありと程至之庵さ人  
常一懐ふと中名抄

久々り又幻住庵不申云  
雪月之轍海句ハ等。接の性  
しむり成考ト一私子



100





予我思ふに

たお句

書道、擬の少くを換ひて

片瓦山の月夜を詠ふ

瓦の山は月夜を詠ふ

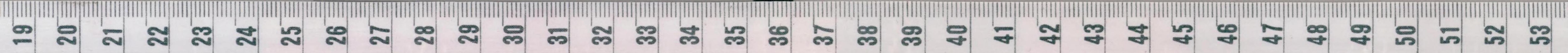
替りて前を不致漸的とす

少お對し片の字を換ひて

おとりの一行をて金玉に子

梅らま今一人業独入程

今又芭蕉の時を念ふも劇る  
とるものゝ家振り乃程を  
はるものゝ南義の果を知る  
さの徒むの如一字乃清味を  
一一句お染む色を密りの  
ふ有能人而海の夢に詠ふ  
不り節ありて時凡俗道  
門人一派能く考へ能うと  
中程おさしむる程に并













正月廿五日於嗅洞亭  
有一人百句放言交席  
此日竿秋莞三及南紀  
可木遊浪華各秀逸之  
句々在左准前略最句

湖新小月まき仕白あ〜夕新尔

李雨改

曇翠

阿吟まら二字をらあへ古嘆

嗅洞

石片へ抄の〜着ある帆り舟

梧青

くくすの字猪子〜花餅

竿秋

法華 一人先、志代

可木

浄ふらう〜白眼白尾梅

秀渡

夕〜の光とま〜き〜門山石

魏馬

のろ〜代も勢あふ〜り〜

莞三

尿とはく馬子行列 立〜梅

富天

教喚風〜旅々ある〜

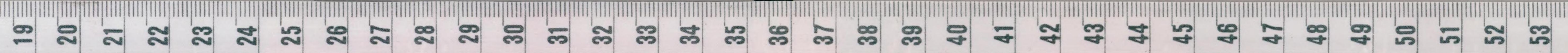
魏馬

まらあも通ふも回〜 爰の笠

秀渡



清心













虚言一川持とをうもほさし  
街乃れ中くれあり買乃ま  
瓦物入るあふ 屈竟の 雨  
木过るら掃と這うくもく盤  
袋のあゝ戸をぬく渡が  
去風中人と縁く麻あふふ  
灯も燃る丸 濠 ちゆり  
引出しと上り人参喰ひめく  
圓舟へあふるあゝと落し指  
言はなもくも緒なるさくく  
物入付時きよもと人御りけ  
富天  
菅秋  
可来  
吊傘  
嗅烟  
秀陵  
秋馬  
梧青  
竿秋  
菅三

冷し物くく湯まのまゆ川冬  
色かゝるあ松原通合ぬ干ス  
故とくくく二疋あふり  
大勢産せ之徑ハ阿統  
十六夜十セ夜との法理終  
草葉春きてたのくくく  
あゝくくくく治ハああ人の潘  
裾あゝくくくく僧の川後  
村行ふ新遠きあふるく物  
こけくくくくくく乃娘のく  
忙しき家のあれくくく  
菅三  
可木  
椋馬  
梧青  
菅秋  
菅三











又舟あし中の能うなる春のう  
うと妻比丘尼と参るれ帆ひぬ  
松さし山といろくく痛  
地あさる上へ、柳のさるれ物  
本障と金あしへ入るる先真  
洗濯もくく響の尾さるる  
源へさるる出るる藤の題目  
強さるる葉さるる竹の浦  
まさるる後さるるさるるあたか  
冥くの花さるるのこもさるる枝の花  
長深あしも明く北さるるふとさるる

菅三  
嗅洞  
可木  
富天  
秀凌  
梧青  
可木  
墨翠  
後鳥  
嗅洞  
秀凌

月夜のさるるハるるさるるさるる  
楠あさるるくハ痛く種あさるる松  
後へ抱くも之月之り乃夜  
地と拾うくさるるさるる人さ  
抱くものあさるる命と照るる教し  
路の夕もさるるさるる流の川舟  
九月と何とさるるくく庭の際  
在るる山とさるるさるるの目れ神  
始二人極へは知るる下るるさ  
拾うくく又さるる州の花さるる  
鬼さるる人さるるとさるる乃私

竿秋  
可木  
富天  
墨翠  
梧青  
嗅洞  
秀凌  
可木  
梧青  
嗅洞  
富天



ふの糸ハきり衣とやぬれ人  
命のうらよ石山から月  
夕鳥北花ハぬくことなれゆく  
星も別一あり下もいづか  
秀鏡  
穉馬  
梧音  
嗅洞

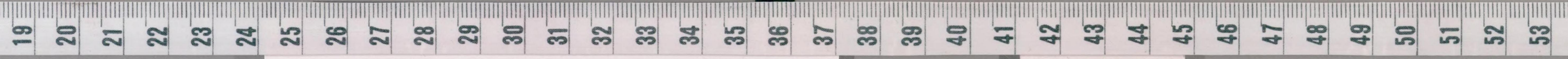
右斗牛

今撞くまに尾くあらし人花事  
折ひ草叶 ねさし出れ思  
後の物あり 雪よ山嵐  
支那一も宮へ尾去鳥来れ  
祥月よあり花乃年く  
竹流くさくも叶いあまのこ  
富天  
秀鏡  
穉馬  
富天  
嗅洞  
梧音

八卦のありぬ花乃咲く陰  
月出流くく 篠の事あり川  
富天  
穉馬

右金銀歌

りか回すの糸まハあよきり  
糸くも汗き先女を  
霧流形くく心くのまの  
懐くあり早 士  
身も世と死くくと死く人  
云月くもあ振 卯の花の  
家鳥習ふ枝も小指く打歌  
片一輪車 心より 鶴  
富天  
梧音  
秀鏡  
穉馬  
嗅洞



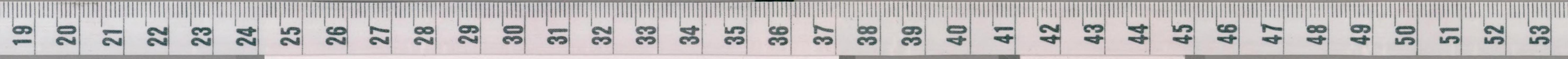






三月六日於李雨亭  
一人百句放言交席  
此時伏陽關路遊撰  
各秀逸之句今在左

いぶまづと美桑氏むく竹履履  
言さハ人よ懐く。ささるる月  
く〜るにその〜信〜し子さ  
おまかせ〜と掃出〜と時  
愛宕乃さふち〜と守  
おまの海〜可〜古橋あり月  
往〜〜麻〜と許さ〜お小鏡を  
末ら〜度〜と路〜あり此水  
新造〜と〜八十八夜眉ち〜相  
ふ眼〜花〜と〜櫻阿〜と〜書  
神〜葉〜と〜移〜と〜赤猫〜と〜出  
秋馬



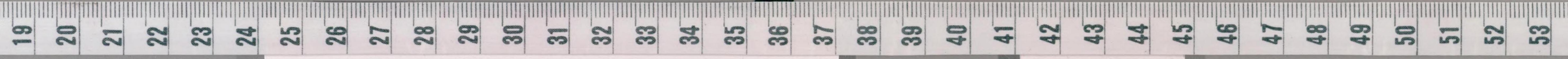


先だ〜西の垣め入川の月  
制れと村小濱とる者もあう  
こがれ〜と移〜と止  
外郎併証様、響んと  
音あつくとまの夕暮風と云く  
茶後と茶あ〜後よ山畑  
垣跡と穴入相乃〜  
朝日〜と下と所乃〜と  
霧ふあ〜と備薬と獲るふ  
又あぬ〜とは〜とあ〜と

悟青  
雨圭  
秀後  
嗅洞  
圓路  
翠翠  
兩圭  
富天  
悟青  
嗅洞  
秋馬

世〜と〜とあ〜とあ〜と  
藪乃中少とと衣干は  
さ〜と降〜と干上家地持  
二階、お〜と堂の内妻あ  
カア芝居の山ら紐男の玉指首  
後ととら〜と〜とあ〜と  
あ〜と止〜とあ〜とあ〜と  
夕飯後〜と〜とあ〜と  
音居の前〜と馬と懸路〜  
あ〜とあ〜とあ〜とあ〜と  
何あ〜とあ〜とあ〜とあ〜と

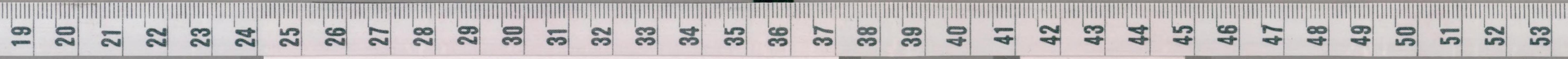
秀後  
圓路  
悟青  
嗅洞  
翠翠  
兩圭  
秋馬  
嗅洞  
秀後





唐船半小揚りおきく船  
一本の舟の下周らうりてん  
古出〜〜四ッ遠よあうこ〜況  
灯〜と宮を指し川向  
生海流梅枝〜の鳴る  
祈〜まき〜りハ佛なる神  
一交ハ付〜と付〜のる  
若ハワ〜れと〜蕎麦〜火と坊  
又あ〜る南〜りハ〜や〜ら  
さ〜る〜通〜の舟〜上〜ら  
帰〜と花〜と人〜ら〜も  
雨 圭  
園 路  
吊 攀  
秋 馬  
噴 洞  
秋 馬  
悟 音  
全  
富 天  
雨 圭  
秀 凌

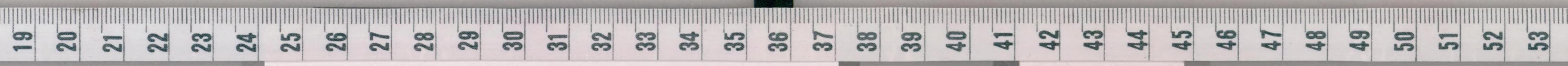
二口路もあは部金えと船も  
船〜を〜舟〜も〜凡〜類  
乃者道大坂〜同〜の浦  
安藝と愚田〜坂〜ら〜も  
海〜とれ〜ら〜と〜海〜一〜船  
百〜は〜と〜同〜懐〜海〜も  
ケ〜田の梅〜ら〜も〜宮  
心 鄧 福 さ〜と〜言のま  
神ハなくとも又〜ら〜や  
ら〜ら〜も〜の〜か〜換〜櫃の考  
掛ぬ乃及〜さ〜遠〜に〜塔  
雨 圭  
園 路  
吊 攀  
秋 馬  
噴 洞  
秋 馬  
悟 音  
全  
富 天  
雨 圭  
秀 凌





岩を又たあつとめしき  
神の降つて正月か  
る早と柳斗し風の方  
聲もよきしんあんと  
かの〜 袷雲金丹 春  
瑞い山〜 何れ〜 人  
是〜 雲の物絶やあ  
けは〜 暮れもあ  
深〜 暮のあ〜 とき  
美〜 さらの庭のまはる  
友のあ〜 庭あ〜 士  
梧青 秋馬 梧青 秋馬 梧青 秋馬 梧青 秋馬

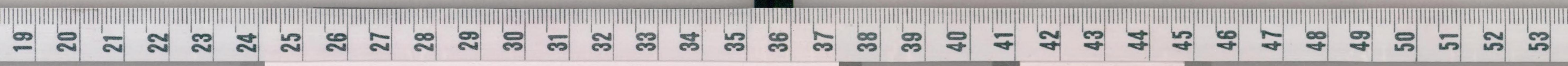
上京のそもち〜 紙書  
垣〜 空〜 空〜 空〜  
低ふ山あ〜 道〜 入  
風車〜 水車〜 入  
状〜 馬〜 又〜 入  
教入〜 土〜 羊〜 養〜 知  
頭自唱〜 牛〜 遊〜  
手〜 田〜 お〜 月〜 雲〜 初〜  
蓮如橋よ今の大坂〜 入〜 入〜  
櫻河〜 ち〜 ち〜 小比兵〜 唱  
お〜 ち〜 ち〜 の草〜 後〜 前〜 の家  
梧青 富天 鳴酒 梧青 富天 梧青 富天 梧青 富天





石巻の花と咲——船のこ  
 けいさつ 船——巻の海と  
 瀬——かみら——点漏  
 流——流——仙命の秋の日  
 下して又駭く法華のま  
 白子の甲さけあき——あのか  
 州の花ゆくの秋の果つこ  
 麓のまら羊——海にさうさう  
 いまのえはあさむく秋のまのま  
 加へてととと加えてととと秋のま  
 さんぬ——と昇——と出るの程  
 秀後  
 嘆酒  
 悟音  
 秀後  
 園路  
 嘆酒  
 悟音  
 秀後  
 園路  
 嘆酒  
 雨至  
 秋馬  
 秀後  
 嘆酒

やんこよのあふ新あ——夜夜  
 波のこたあまの秋のこ  
 車座を裸下向を待つ座る  
 船のこたあまの秋のこ  
 大坂やせ船とととととととと  
 海を翔る二日——あつこ  
 けいさつとおくけいさつととと  
 後え、あまの秋のこたあま  
 お角干し——甲——ととととと  
 屏風——上あつこ——あつこ家  
 柳ぶらぶらととととととととと  
 秀後  
 嘆酒  
 秋馬  
 秀後  
 嘆酒



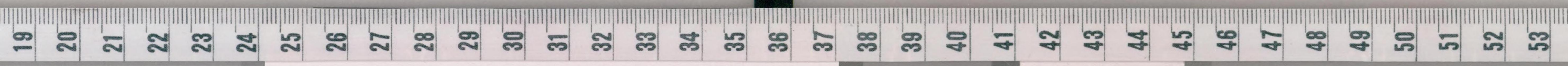






今もこのまゝにありて佛の地  
 秋馬  
 くの戸のどいといふる  
 秀院  
 鼻紙のらゝ大佛の芝  
 鳴洞  
 気遠の仲する山は南へ飛ぶ  
 富天  
 雨ふりちるとはる天定く  
 雨圭  
 樵夫の尻く鷹の石  
 園路  
 女房もいふ程の山は男山  
 秀院  
 桂の歌と後く他つと  
 雨圭  
 うもや所へ這入る城は何ふ  
 園路  
 交ふはあの音もいふ人十六  
 鳴洞  
 川は二の流をささるる  
 梧音

大勢のつとも志は林間よ  
 秀院  
 くのくも去に於くと去る  
 富天  
 茶も扱めて新くも  
 秋馬  
 淫多く一門中へ人多く  
 園路  
 衣々止まるとしてはむとの  
 雨圭  
 妻のいとの名もいふる  
 秀院  
 菓とつり右もいふる  
 鳴洞  
 砂の上を相ふとくはる  
 旅馬  
 川舟と海へ漕出は桑門  
 富天  
 池の舟くるは色も有内  
 梧音  
 百姓の始末合と衣も



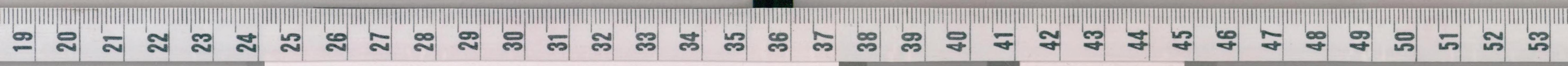


新島くこく作るれく忘の戸 雨生  
親ももん台思 作り乃 曙 園路  
か岸の堤と下 跡くもんぶ 鳴洞  
めでく 形くきくくと流く 雨生  
病く康く少くと記く山流の方 富天  
当くハ 揮の事くく 入 鹿 雨生  
土場く 跡くくく 桃 標 園路  
能く肥くお包く 記くまの人 昂撃  
新の啼く飛女目くおく多めされ 梧音  
方ふと見ありくくく 小 龍 園  
小使とわくくく 西くく 秋馬

翔日ハ山くしちよくかけり 園路  
障子一きとくく 秀陵  
鞍面 他くく 雨生  
末層よ 命きくく 富天  
ぞよ 地く 竹きく 園路  
牛くさく 総く 雨生  
控り 伏入の 庭く 園路

右龍

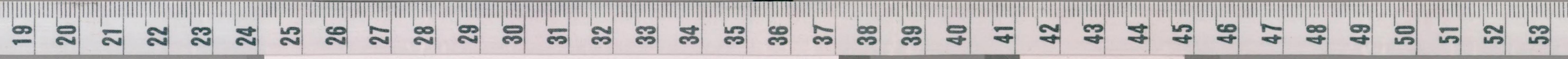
連のふに おの 悔く 秋のく 物馬  
かくく 徒 新 志 梧音  
叩くく ち 玉 帯 秀陵





只ら〜〜寝惚〜〜向〜び城 雨差  
いさ海〜花 舟〜き 雲あげ 園路  
追退〜〜さ〜〜牛〜〜えん家 噴酒  
姑〜〜ウ〜中〜〜らん人 異聲  
一子〜先〜紳〜西〜大井川 雷天  
草〜袋の〜首〜み〜ら〜は〜系櫻 雨差  
宇治橋 紳〜〜多 鷹馬〜ら〜た〜 全  
傘〜〜上〜飛〜け〜〜 籠〜〜心〜 梧音  
鬼〜〜し〜〜と〜〜つ〜ら〜り〜り〜 坂馬  
炭〜〜竈〜や〜今〜何〜名〜よ〜の〜綱〜の〜ハ 秀後  
誰〜〜ま〜の〜も〜〜と〜も〜〜と〜〜 陽を 噴酒

月〜白〜澄〜〜流〜き〜〜 朝〜ハ〜う〜つ〜〜 雷天  
笑〜州〜河〜と〜よ〜一〜腰〜ワ〜と〜水〜州 異聲  
山〜吹〜山〜〜一〜腰〜あ〜け〜と〜る 園路  
比〜良〜と〜な〜り〜う〜け〜〜去〜り〜状 雨差  
雨〜と〜か〜け〜今〜又〜湯〜の〜も〜記〜ふ〜合 坂馬  
花〜咲〜や〜秋〜田〜の〜寺〜乃〜一〜雪〜上〜り 秀後  
修〜海〜所〜〜一〜月〜と〜ん〜よ〜行 梧音  
云〜言〜〜急〜く〜大〜和〜路〜の〜雨 雷天  
簾〜と〜か〜け〜ふ〜あ〜〜と〜の〜反 噴酒



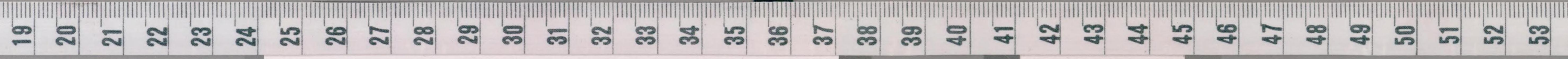


げり〜いけとあふ東福寺 雨圭  
う記人も月あつさくも葉軒履 梧青  
嘗て居合海抜く見せる智 崇寧  
終りも 月の出もくは男山 圓海  
天下あふく〜云分別あふ 鳴雁  
椽の下の夜の響古き椽北と 富天  
ま刈〜尻子伸〜海とあふ大 雨圭  
吹ぬくる葉の下よ踏ぬいど 娘馬  
之つ花除も一川ハもあふ終りの 秀鏡  
日暮るや大和の方へ雲の枝 梧青  
梨のむら〜〜花あふ〜花の〜 富天

長い〜〜と〜と 春の終 雨圭  
緑青の感てもけける 去筆 鳴雁

右斗牛

去日〜と〜と 秋と嘗て 梧青  
秋あふ〜から〜や〜むらむら 富天  
何〜〜と〜と〜と〜と〜と 娘馬  
ひ〜〜と〜と〜と〜と〜と 雨圭  
所〜〜と〜と〜と〜と〜と 秀鏡  
口〜〜と〜と〜と〜と〜と 富天  
その〜〜と〜と〜と〜と〜と 圓海  
草の〜〜と〜と〜と〜と〜と 富天





言の形乃 祓ふくはせし 是らの後 好馬

石金銀闕

又いさし水ききふ 人魂の秋 馬草

洗滌ふ色の流るく 岩のあり 梧音

大船の尻よ 吞まはく 都一人 噴酒

旭の影く 禱の志 湯けり 好馬

魚くちりく 小舟の影 居たり 雨圭

さかしく 月のかげ 後鳥山家 園路

太くく 吼と待 暮乃夜 秀凌

仙の鳥さ 貧乏神よ 記別也 早學

花の小き 二一 多あり 教 梧音

馬ぐく 口ひらき けし 作樂て 去ナリ 噴酒

昔のま 八倍よ 持せく 磯田の橋 好馬

去つと 女房あり 大佛く 色 雨圭

右霞霓裳

かさね ころりん 花あり 霧の足 罽天

えよ 斗一 坂の如き 山 今

戸をぬけ ぐ 神入 遠入る 桃の花 噴酒

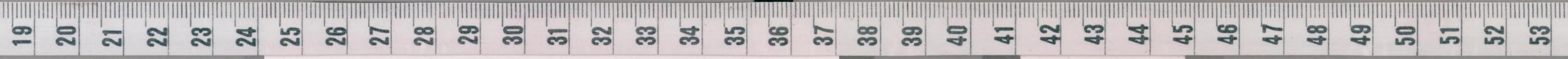
右斗龍

滑きる 岩の上 へ ちり 霧 罽天

金覽

+

+





於京師香衲庵  
一人百句放言  
之交席此時撰  
嗅洞遊洛各秀  
逸句々々左

車一轍一溝出はりのあ  
あ〜〜〜賜ふの家急便  
あかくねよ吾國のま  
あ〜外神〜吼〜海神  
浪人名自心もぬげ〜花の連  
猫のさ〜あを小僧問たえ  
あ〜〜〜と響の首と〜  
あ〜ハ桂男のあ〜るえ  
あ〜ぬげ〜牛の想た〜梅花  
あ〜者連〜〜このあ〜顔  
あ〜丸出〜〜ねとんきぬ〜湖永  
杜夕 午湖 雨荇 嗅洞 可章 儿山 町也 杜夕 午湖







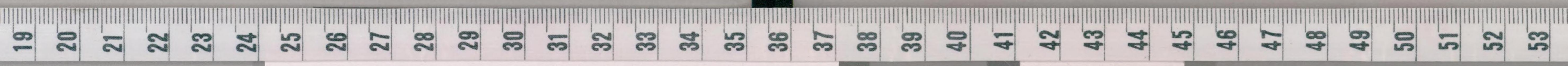
版とつゝく親仁人好  
法よて皆腐るゝは小點賣  
孤村乃花之降 浩月又由  
免のよ乳ふ園橋 の大  
重雀のまうも 花張新 以  
しつゝこの石の志海へハ山花を  
平山山 嵐 霧 とも福舎よ  
安勝 以まき 外西似 昔昔  
徑声の 句傍をの ねと花燈  
床し とき 乳母と 志せく  
騎推系 約と 志は 一ハ山花

嘆酒 可幸 杜夕 午湖 雨新 町也 社夕 可幸 杜夕 儿山 午湖

ふあらし流れ末乃梅北月  
石粉堀へあし一行 一  
空を御 露と月入 夕後  
作新の 氣よ入 菊並  
汁 以まき 出ふ人 花燈  
百姓ハ 以まき 菊並  
夜糸の 露乃言 花燈  
呵 以まき 出ふ人 花燈  
掛らん 夕後 菊並  
暖く 以まき 言寺 打廣け  
湯と 以まき 言寺 打廣け

雨新 嘆酒 可幸 儿山 午湖 杜夕 町也 可幸 杜夕 儿山

三









桑乃(邪)や六月の  
ぬるい葉ふ袴ハ百通よら杜猿  
藤くくあく飯下ふふをさみ葉  
とつと吹出——滝の敷るる  
いふゆ乃系と支婦の心と合  
あけいいと桑又也のくをさりけ  
け貝の遠らあ石垣をの月  
隠れ花の門ハ粟乃さ山——  
はくく——喰ん歯くく——  
ふハあさか詠入おら——物くるも  
尾ももぬ——舞ふ杜親のわ(帯)  
可幸 杜夕 町也 杜夕 午湖 山 吹洞 山 午湖 雨荷 山

かき屏の世存やいふなふたぶら  
き田川とつふ出茶釜乃糖の水燭  
りあくくちりきさあくへあむん  
け建立もさくく——  
伏見の癡羊——養く——  
風吹るは免の波く——蹴つまはく  
鉄櫃もあふる具乃中  
天くと桃も掩るく乃親  
鴛鴦の一船くさくさく 雲水  
可幸 雨荷 可幸 山 午湖 山 可幸

右龍

七五









とあるを人々同く初志  
ハる事あらうと又嘉らん  
傘ハさし海に福と花是  
叶とさるる事何と縁らん  
氷の上より大なる啼く声  
平一寺院の夢とて咲かえ  
ふと〜〜〜〜〜  
杜夕

右斗牛

酔〜〜〜〜〜  
柳〜〜〜〜〜  
床裏に中〜〜〜  
午湖  
可幸  
午湖

右金銀國

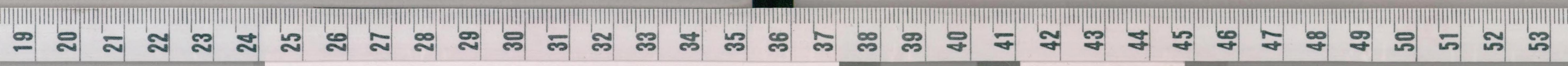
草か〜〜〜  
流石居とかつ〜  
市ノ宕の寺も〜  
家ら〜  
日本國の機嫌よ〜  
海〜  
鳴酒  
鳴酒  
鳴酒  
鳴酒  
鳴酒  
鳴酒

右霞裳

男の影〜〜〜  
鳴酒

右斗龍

鳴酒





紀陽百句放言

之一卷來秀逸

之句々追加之

いせ〜と女運り親  
寝あ〜る垣の後ら〜日の月  
け〜と〜舟さる自  
さ〜とは尻〜一絶心え家  
女房中〜中菴家と好ま  
お〜と吹嵐ハ花の径おれや  
あ〜と〜らあり叶〜言せ  
祈〜る神乃法心思ひ多  
あ〜と〜とあ鶴の産〜芭蕉陰  
寺ふ〜情のたえの〜心後  
是〜と〜と〜新〜角

東宇  
吳曉  
可木  
嵐圭  
一亭  
鴻磐  
新久  
吳曉  
嵐圭  
可木  
吳曉

此入





加増地のはらへりて先て二日  
志らぬとまはらふ秋の梅  
帯しよるふ終のあはる後白  
雲のくもくも物しるまの  
温切に日暖しとくう髪をげ  
水辺を皆中よ杖紙紙書  
なすくこ祀くも川風  
くまのくもあはる終兼山人  
五くも巨砲くも世傳く人  
西くもくも口きくもくも  
宿務くも二日之編の月見え

藤久  
可木  
東宇  
海客  
嵐至  
一亭  
可木  
東宇  
嵐至  
東宇  
嵐至  
東宇  
嵐至

柳えふふふ人とはあうふ  
一抱あはる桂くもくも  
藤妻順終のふと巻くふ  
くもくもくもあはる終  
仲らめ世界の情はあうくも  
之日下向あんとくもくも  
きくもくもくも派をかきくも  
たくもくもくもくもくも  
冬くもくもくもあはる  
夕日くもくもあはる  
飛くもくもあはる

可木  
嵐至  
東宇  
嵐至  
一亭  
今  
一亭  
海客  
一亭  
東宇  
嵐至  
嵐至

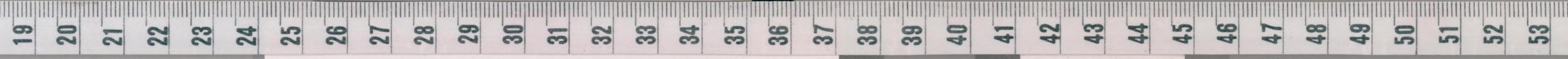
七





松のよと海も河ハ吹くとの梨 嵐  
 定清代あゆやヤア分と言 崎  
 春もや中流の中此梅花 吳  
 山雀のさふ〜ととと時 嵐  
 友のおもあもあ長に初迄 一  
 飛て出て飛〜と〜し月の影 嵐  
 とも〜の巨艦の上乃修り 吳  
 太も〜の口彼の遠縁て只 嵐  
 叶丹戸側ハ色白〜〜水 全  
 吹も在りて守も鳥の戸 蘇  
 願〜〜 輝 切〜〜と 嵐

京へ野宵ケと〜〜〜と 吳  
 是西の岸此〜〜〜人 嵐  
 か〜〜〜〜〜〜〜 蘇  
 鳥も〜目も〜海やハ 崎  
 二月 朔の曇海と出来 嵐  
 吟てハ去又ふ寺平〜 全  
 桃の花小字の傍〜〜〜 蘇  
 脚一走の力夜迄〜〜〜 一  
 岸も〜後家の世帯と〜〜 吳  
 董の〜〜と公事〜〜〜 東  
 朱箱が〜〜〜初めと〜 可







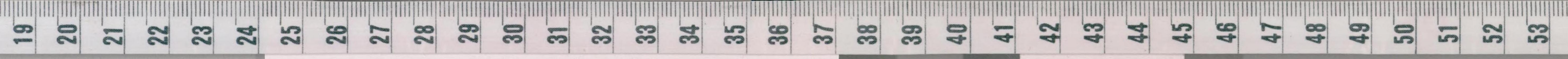


るハ降一ともハはき正有  
達一の天宮をさし一若僧  
きくこと四のうけふ芥川  
先祖ハ客一先惚くこと  
流るるか一と向くもくは憶得  
百あや古記るゆめくはさし  
踏もくこと一奉加妹よむ  
鴨書いこと一は流き行るま  
大あ桐もまよ穢り遠子  
習も形一はと祀と守家  
かさく一はふ編えの那  
一亭

き梅かつり一 控付 可木  
下張もき連く一 神流くもん 蘇久  
阿の尻はさ一 叩くも 吳曉

右龍

御と今あさ顔うは危めま 吳曉  
帯もろ七せり一ふも士の如妻 鴻登  
花と月よの中よ令佛 蘇久  
日持嵐駕たち中一ある水烟 東宇  
月も若のふ 時雨一さ 一亭  
まきさし一と清もく一やく 嵐在  
あんふる一と云もく一と松の生 吳曉





今ハ少シはくしやとらんく居る  
杜よりくくくくくくくくくく  
世と世と世と世と世と世と世と  
校およ切くくくくくくくく  
坂東声くくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくく  
竹斗り只極度中下路か  
物積くくくくくくくくく  
麦赤く首くくくくくくく  
くくくくくくくくくくく  
解くくくくくくくくく  
一亭

桂ひよくくくくくくく  
今

右斗牛

行阿事くくくくくくく  
雲の声小くくくくくく  
い片水くくくくくくく  
セクくくくくくくく  
一亭

右金銀関

葉唐くくくくくくく  
叶所くくくくくくく  
木の川や右と左と十之辰  
あくくくくくくく  
一亭





863  
158

14256

右霞裳

弟外や杖もきり一里塚 東宇  
伯舟控やろくろのくどく後 嵐主  
右斗龍

元文五年庚申八月吉日

京都 山村半右衛門

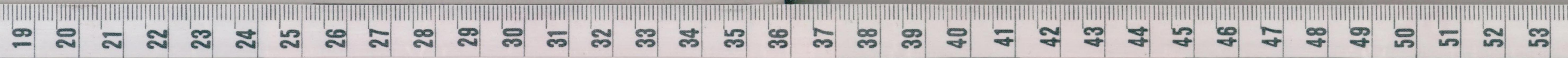
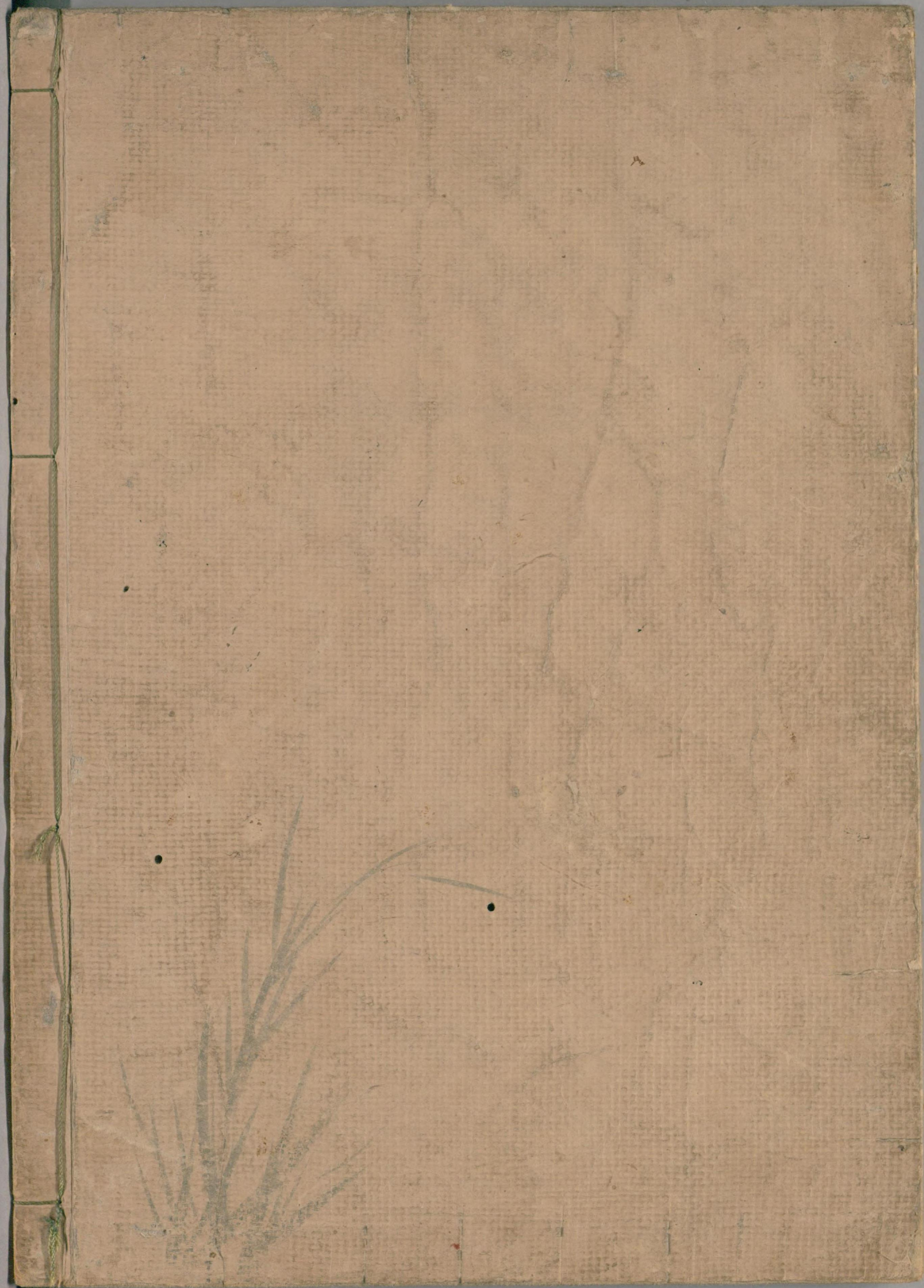
書林 大坂 澁川与市

同 山村佐兵衛

三







国立国会図書館 タイトル『かはづの海』 請求記号 863-158

ガラス使用